

差別や偏見は無知から始まる

滋賀県 滋賀大学教育学部附属中学校 1年

中村 燎 なかむら かがり

「ハンセン病家族差別敗訴 国の責任一転認めず」(平成三十年七月二十五日朝日新聞より)

私は今年の夏、家で目にしたこの新聞記事に触れるまで、ハンセン病について全く知らなかった。その記事の内容は、ハンセン病患者の隔離政策により患者だった母親と共に差別を受けたとする鳥取県の男性が、国などに損害賠償を求めたというものだった。私は、今の日本で一体どんな差別があるのかを知りたいと思い、資料やインターネット等で調べることにした。そして今回ハンセン病について調べていくうちに、今の日本で本当にこのような不当な差別や人権侵害があったのかと驚き、ショックを受けた。さらに、この差別が今もなお現在進行形であることに、私の中の疑問や憤りがどんどん増してきた。

そんな時である。この憤りについて母に話した際、母から古いビデオテープを手渡された。テープの内容は、小学校の教員をしている母が、若い頃ハンセン病患者の方が、病の中で絶望的な状況の中、どのように立ち上がり、またどのように患者の

方々を支えていくことが大事であるかに興味を持ったため、実際に患者の方々をインタビューした時の記録だった。そのビデオには、瀬戸内海に浮かぶ離島という環境が、隔離に適していたため、日本

初のハンセン病の国立療養所として発足した長島愛生園での患者の方々から、多くのことが語られていた。私が生まれる前、今から十五年ほど前のインタビューではあるが、その中には患者さん自身の肉声があった。例えば、母と話していた女性「島さん」。島さんは、とても穏やかな表情で丁寧に話しておられる。その手指の曲がった容姿から、ハンセン病であったことを伺い知ることができた。

そして、島さんの名前は本名ではない。患者さんたちは愛生園に入所するにあたり偽名を使用させられたと言う。その時点で、患者さんたちは世の中から存在を消されてしまったのだ。そんな島さんから、ここに書きたくもないような迫害と差別を受けてきたこと、そして長い長い時間をかけて「らい予防法」が廃止されるまで、人権を取り戻すための闘いがあったと知った。

私は、怒りを持ってそのビデオを見ていたが、なぜか島さんには、自分の運命への恨みすらみがない。島さんから出てきた言葉は、「ここに來られて良かった。差別は受けただけれど、一緒に闘い生きた仲間

や先生、お医者さんが居てくれたから。」というものだった。

数多くのハンセン病患者の方々全員が、島さんのように感じておられるわけではないかもしれない。でも、私は島さんの言葉を聞いて恥ずかしくなった。ハンセン病について調べ、患者の方々の心を理解したようなつもりでいながら、実はよく分かっていなかった。私の中にかわいそうだというような偏見があったのではなかったか。私は、ビデオを見てしばらくの間、心が重く自分の何が間違っていたのか考えることさえできなくなってしまった。数日後、私はもう一度心の中を整理してみた。私の「思い込みや無知が偏見や差別を生み出す」ことを強く感じた。島さんの「苦しかったけれど、自分の心まで病気になってはいけない。相手のことを思い続けることで、いつか差別はなくなっていく。」という言葉が重く、心に染みていく。これまでの私のように、何も知らなかったではすまされない。ハンセン病は治る病気であるのに、誤った知識が広まって、人権侵害が長く続いてしまった。同じ間違いを繰り返さないためにも、事実の風化を防ぐことが、今の私に出来ることだ。正しい知識を活用し、人々を助けられる人間でありたいと、私は思う。